

《論文》

# 連邦作家計画 (FWP) と黒人作家たち ——口承の語りの文字による記録、 ラルフ・エリスンを中心に——

峯 真依子

はじめに

連邦作家計画 (Federal Writers' Project、以下 FWP) について、1962年に日本で刊行された『黒人文学全集』で「ライト、ボンタン、マッケイ、エリスン、モトレイ、ヤービー等ほとんどの黒人作家がこれに参加した」(319) という、短いが看過できない言及がなされた。しかし、彼らが FWPに関わっていたことは、これまで作家のバイオグラフィーにおいて、別々に、また断片的に紹介される程度であり、また FWP 自体の研究も国内では少ない。

そこで、本論は、ふたつの点を明らかにする。まず、FWPとはどのような政策であり、それに黒人作家がどのように関わったのかを概観的に把握する。つぎに、中でもとくにラルフ・エリスン (Ralph Ellison) の FWP への関わりを明らかにする。彼が FWP からハーレムでのフォークロア収集を依頼された際、自らを透明にして町中で悪さをするのできる南部の黒人の話を魅力的な話術でもって語る者がおり、それをエリスンは書きとめて、FWP に提出した。このようにエリスンの場合は、FWP での経験が、『見えない人間』(Invisible Man) に色濃く反映されているため (Busby 13-4)、とくに注目しておく必要があると思われるからである。

以上の二点をふまえ、本論が1930年代のFWP

という黒人文学 (史) におけるひとつの空白部分を埋める一歩になればと考える。

## I. FWPの基本的性格—偉大な叙事詩の編纂

周知のように、FWPをスタートさせた雇用促進局 (Work Progress Administration、以下 WPA) は、1935年の緊急救済支出法による雇用保障計画の中核的実施機関であった。WPA事業の内訳 (35年7月~40年12月) は、ブルーカラーへの支出が全体の104.9億ドルのうち78.5%の82.4億ドルを占め、残りの21.3%の22.3億ドルは非建設事業、すなわちホワイトカラー向けの雇用計画として割り当てられている。それは主に、保健事業や教育関連事業、公共サービスなどであった (小松122-6)。公共サービスのひとつとして、WPAが芸術プロジェクト、別名フェデラル・ワンを開始させたわけであるが、それは「アート、音楽、演劇、そして執筆活動の分野において、現在失業中の人びとを雇用するという国家的プロジェクト」(Mangione 42) であり、FWPのほか、連邦美術計画 (Federal Art Project)、連邦音楽計画 (Federal Music Project)、連邦演劇計画 (Federal Theater Project) なども存在した。

この計画については「不況のさ中に『悲劇』を演じ、ダンスを奨励するような余裕財政資金などあろうはずがない」などと断ぜられ、世論、マス

コミ、保守派議員等から執拗に激しい非難や嘲笑を浴びせられたものの、政府当局は「彼らも、他の人間と同様に食べなければ生きてはゆけないのだ」と反駁したという (小松 128)。その当時、ニューヨークで生活していた石垣綾子は、次のように回想している。

「W・P・Aの芸術プロジェクトは、芸術にたずさわる者たちが、象牙の塔を飛び出して生活擁護を要求した結果であった……外国生まれも差別されることなく、黒人の人種差別もなく、社会批判や反体制の芸術的表現の自由を得たのも、彼らのたたかいがもたらしたものであることは言うまでもない。社会全体の中にたたく情熱がみなぎっており、それが芸術家を燃焼させる原動力となったのである。画家ならばモデルも画材の材料もすべて支給され、できあがった作品を納めればよかった。それらは政府のあらゆる建物の壁をかざった。かびくさい陳腐な絵にかわって、斬新で民衆の呼吸を伝える美術作品が、ほんの短い期間に、冷たい建物の雰囲気を一掃してしまった。公園の木かげには彫刻が立ち並べてすえられた」(135)。

石垣が回想するように、大恐慌の一方で、当時の社会に平等主義の理想が存在し、また「民衆の呼吸を伝える」という芸術家たちの熱意があふれていたことは、注目し得る。多くの黒人作家に、国家政策としてFWPでの雇用と作品発表の機会がいっせいに与えられたという驚くべき事実は、このような時代背景が後押ししていたといえる。

まず、FWPのディレクターであったヘンリー・オルズバーグ (Henry Alsberg) が最初に試みたことは、アメリカの全州、そして数多くの町のガイドブックを作ることだった。このガイドブックは、旅行を奨励したが (Hirsch, Portrait 50-1)、実物はきわめて分厚く、あまり移動に適していなかったと思え、内容も道路地図以外に、人々の衣食住や、郷土史、様々な民族文化が紹介されるなど、通常の観光案内のイメージからはほど遠い。むしろ、その町ごとのエンサイクロペディアと

いった印象さえ受ける。

また、FWPの次なる段階として「元奴隷の研究や、都市労働者、少数民族、そして南部の小作農者や繊維工の労働者たち」(Botkin xviii) のライフ・ヒストリーやフォークロアの収集と出版が行われた。そこで国家規模でこのような二つの大事業が行われたときに、なぜ人々の生活や文化、民族、地域性といったテーマが選択されたのか、FWPで共有されていた思想や、目指されたゴールを確認しておく必要があるだろう。

ジェラルド・ハーシュ (Jerrold Hirsch) によれば、FWPは「偉大なアメリカの叙事詩が出現する可能性」(Portrait 8) というビジョンを見ていたという。この「アメリカの叙事詩」とは何だったのか。たとえば、フォークロア部門のナショナル・エディター、ベンジャミン・A・ボトキン (Benjamin A. Botkin) は「アメリカを形作る多様な集団は、自分とは異なった集団から学ぶことで利益を得ることができる」(Botkin xvii) と考え、文化多元主義的なアメリカを希求していたことが知られている。さらに彼は、ファシズムの興隆を目の当たりにし、多様性を育てることがアメリカの民主主義を保証するという確信を強めていくようになる (Hirsch, Journal 18)。1930年代のFWPという国家政策において、地域性の違いや、黒人の存在、移民の歴史といった、アメリカの絶えざる難問が、むしろ民主主義を守る肯定的価値として、とらえ返されたことは注目し得る。

この文化多元主義の理想のもとで、「FWPは白人、プロテスタント、ミドルクラス ... といったアメリカの定義を拒絶し」(Hirsch, Journal 18)、むしろそこからこぼれ落ちる人々の声を書きとめ、「広く多様な読者たち」(Botkin x) に届けようとしていた。別の言い方をすれば、そのような理想を、アメリカのナショナル・アイデンティティとして国内で共有されんがために、彼らの声は他のアメリカの人々に、聞かれる必要があったと言えよう<sup>2</sup>。したがって「アメリカの叙事詩」とは、文化多元主義の理想に向かって、広大な国土に暮らすあまりに多様な集団が、ある限られた時期に一斉に語りはじめるというプロジェクトであった

といえる。それがFWPの使命であり、無数の無名な語り手たちの声が、「偉大なるアメリカの叙事詩」をつむいでいったのである。

しかし宮本陽一郎は、FWPによる文化多元主義の思想は、いわゆる多文化主義とは区別されるべきものであると主張する。「ニューディール政権の文化政策は、きわめて強力な国家の統制力をその前提と目的にしている。かつ文化の多様性は、『国民文化』の豊かさに寄与するものであり、最終的には『国民文化』という地平で集大成され記述されるべきものとなるのである」(300) という。そのようなFWPの性格をふまえると、1970年代に「過去を『底辺から』解釈することを試みた歴史家たち」(Ritchie 589) によって再発見された膨大な数のFWPのスレイブ・ナラティブ<sup>3</sup>は、ある複雑な経緯によって生まれていたことが浮き彫りになる。その複雑さとは、1930年代当時まだ生存中だった元奴隷へのインタビュー録音と聞き書きが、普通の奴隷たちの証言が公文書として残されたという記念碑的な価値を持つ一方で、彼らの声は収録時にすでに、アメリカの多様性と民主主義を担保するものとして期待されていたという経緯においてである。

1939年の9月、議会評決によりプロジェクトが州に委託され、事実上FWPは終了する。その名称はプロジェクトからプログラムに変更され、1943年の2月に完全に終了した (Bold xiv)。では、黒人作家たちは、FWPでどのような仕事をしたのか。次章では、それを具体的に見ていきたい。

## II. FWPと黒人作家たち

まず、ワシントンではどうであったか。FWPの黒人問題局 (The Office of Negro Affairs) のトップに、スターリング・A・ブラウン (Sterling A. Brown) が招かれ、またそこは、黒人の人事の監視としても機能した。しかし、人事については州に大きな決定権があったため、限定的な力しかもたず (Yetman 546-7)、その結果が、南部州は黒人ユニットと白人ユニットが別々に作られたこと、もしくは州によっては黒人ユニットそのもの

が存在しなかったことに表れているといえよう。ワシントンのプロジェクトとしては、ブラウンのサポートのもと、黒人の視点による反奴隷制度に関する歴史書の出版、黒人の生活について書かれたものの包括的な目録制作、そして地下鉄道の歴史のドキュメンタリー記録のコンピレーション制作が試みられたが、FWPの終了により、出版されないまま終わった (Yetman 547-8)。

ヴァージニア、ルイジアナ、そしてフロリダ州においては黒人ユニットが花開き、黒人文化に関連する資料の収集が行われた。フロリダでは、ゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston) が、1938年4月から、ガイドブックと『フロリダの黒人』(*The Florida Negro*) の編集に関わっている (ヘメンウェイ 353)。また1939年の5月のポトキンの記録によれば、ハーストンは録音ツアーを組みたい、とワシントンに向けて雄弁な筆致で提案している。ワシントンからの返事はなく、8月にプロジェクトを去ろうかというときに、議会図書館からの最新の録音機材がフロリダに届いたため、宗教歌や労働歌の録音を指揮し、ハーストン自身の歌声も残されている (Taylor 177-8)。フォークロアの収集という命題において、表面的にはハーストンの関心とFWPにあらわれる時代の要請とが一致していたといえよう。

さらにイリノイ・プロジェクトを見てみたい。まず、アーナ・ボンタン (Arna Bontemps) がスーパーバイザーとして参加している。彼は『黒い雷』(*Black Thunder*, 1935) に続く、三作目の『夕闇の太鼓』(*Drums at Dusk*, 1939) を書いているところだった。もっぱら黒人関係の原稿をまかされており、彼の主要な仕事として、1940年にシカゴで行われた奴隷解放後75周年を祝う博覧会 (Diamond Jubilee Exposition) に関連して出版された『アメリカ黒人の行進』(*The Cavalcade of the American Negro*) が挙げられよう (Mangione 127)。

リチャード・ライト (Richard Wright) の場合、1935年に参加するまでは、ほぼ無名に近かった。ライトの仕事は、イリノイ・ガイドのためのエッセイの編集で、昼間は猛烈に働き、夜は自分の作品を書いたという (Taylor 36)。また、イリノイ・

プロジェクトでの数ヶ月の後、ライトはサウス・サイド作家集団 (South Side Writers' Group) という黒人作家のための執筆集団を組織し、マーガレット・ウォーカー (Margaret Walker) を誘っている (Taylor 51)。一方、ウォーカーであるが、仕事の初日に、初対面ではなかったがエレベーターでばったりライトと出くわしたという。彼女はその頃20歳であり、ノースウェスタン大学を卒業したが仕事がなかった。WPAの雇用最低年齢が21だったため年齢を偽り、イリノイ・プロジェクトに参加したという (Taylor 48-9)。

ウォーカーの仕事は、イリノイ・ガイドのためのリサーチだった。彼女の原稿はクオリティが高かったため、スタッフの中では破格の待遇として、家で仕事をする許可を得る。2年間、家で作品を書き、オフィスには毎週一度か二度、顔を出せばよかった (Mangione 124)。彼女の詩「わが人々のために」(For My People) もこの頃に書かれている。また、ライトが1937年にニューヨークに移ってからは、本人に頼まれて、彼女がシカゴの殺人事件についての切り抜きを送るが、それがライトの『アメリカの息子』(*Native Son*, 1940) に発展する (Taylor 61-2)。

ダンサーでコリオグラファー、人類学者でもあったキャサリン・ダナム (Katherine Dunham) も、イリノイ・プロジェクトで、いくつかの価値ある黒人研究に着手する。シカゴの黒人カルト (そのうちの一つは、後のブラック・ムスリム・ムーブメントへと発展していく) や、シカゴの黒人居住区に多く見られた店先教会 (storefront church) に関する研究だった。彼女の著作である『アコンボンへの旅』(*Journey to Accompong*, 1946) は、この時期にシカゴのディレクターに草稿のチェックをしてもらっているため (Joyce 111-2)、FWPと同時進行で仕事をしていただと推察される。「FWPでの仕事を通じて『作家になろうとしていたのよ』」(Joyce 113) と本人が述べているように、彼女の場合は実際に作家になったわけではない。だが、20世紀を通じて芸術の最前線にいた人物であり、ハーストンとの関係なども含め、今後さらに研究されるべき存在であろう。

『ノック・オン・エニイ・ドア』(*Knock on Any Door*, 1947) を発表し、それがハンフリー・ボガート主演で映画化されたウィラード・モトレイ (Willard Motley) は、残念ながらあまり同僚に印象を残していない (Mangione 126)。フランク・ヤービー (Frank Yerby) は当時、シカゴ大学に在籍しながら、プロジェクトに参加していた。彼は「あなたがたインテリはどうぞおやりなさい、高尚なものをお書きなさい……私はがっばり稼ぎますよ」と同僚に言っていた通り、多くの南部の歴史小説でベストセラーを飛ばし続けた (Mangione 126)。

さて、ニューヨーク・シティ・プロジェクトには、クロード・マッケイ (Claude McKay) が、スーパーバイザーとして働いていた (Blumberg 82)。彼の『ハーレム—黒人たちの都市』(*Harlem: Negro Metropolis*, 1940) は、そのときに集められた資料がもとになっている (Mangione 257)。また、ニューヨーク・シティ・ガイドの中の「黒人のハーレム」(Negro Harlem) の章は、マッケイと、シカゴから移ってきたライトの両者の担当によるものであるという (Bold 113)。また、マッケイ、ライト、さらに前述のブラウンは、FWP関連の作家による短編や詩を集めた『アメリカン・スタッフ』(*American Stuff*, 1937) でも執筆を担当している。その他、ライトがFWPで関わった本として、『1200万人の黒人の声』(*12 Million Black Voices*) があり、エリソンがこれを高く評価した (Ellison, *Going* 211; Taylor 203)。

エリソンは、よく知られているようにラングストン・ヒューズ (Langston Hughes) を通じてライトに出会い、1938年にライトが橋渡しをして、FWPの仕事についている (Ellison, *Going* 201-4)。彼の仕事の多くは、市立図書館での黒人史の発掘だった。そのときの成果が、『ニューヨークの黒人』(*The Negro in New York*, 1967) であり、1626年から1930年までの黒人史であるが (Mangione 261)、これはジョンバーグ・センターにマイクロフィルムとして草稿が残されている。

## Ⅲ FWPとラルフ・エリスン

では、エリスンがFWPからどのような影響を受けたのかを、確認していきたい。彼は、1939年になると、フォークロア・プロジェクトに移動となり、間接的に前述のポトキンの下で働いている。エリスンによれば、ハーレムの黒人の子どもたちのゲーム、タイムを収集することが任務ではあったが、機会をとらえては、老人たちから話を聞いたという (Conversation 295)。その頃に提出された資料には、彼が十数年後に執筆する『見えない人間』と明らかに類似した箇所がある。まずは、『見えない人間』で、主人公が身を寄せることになる下宿屋のメアリーが主人公に語る場面から見てみたい。

このハーレムの罫にはまっちゃ駄目だよ。わたしはニューヨークにいるけど、ニューヨークに飲み込まれているんじゃないんだから。わたしの言ってることが分かるかい？ (353)

このメアリーの語りと類似するFWPのインタビューとして、1939年4月30日に、エリスンがハーレムの西147丁目に近いセント・ニコラス通りで出会った (Bascom 36)、ブルマン列車のポーターの語りを見てみたい。

オレはニューヨークにいる、だけどニューヨークがオレン中にあるわけじゃない。わかる？オレはニューヨークにいる、でもニューヨークがオレン中にあるわけじゃないんだ。オレが何を言ってるかだっけ？聞けよ。オレは、フロリダ、ジャクソンビルの出身だ。ニューヨークにきて25年。オレはニューヨーカーってわけだ！でも、オレはニューヨークにいてニューヨークはオレン中にはないぜ。わかる？ちがう、ちがう、お前はわかっていない。あいつらは何をやってんだ？レノックス通りにいってみな。7番街に行ってみろよ。シュガーヒルにも！ぼん引き。ナンバ賭博……発砲だろ、斬りつけたり、陰で悪口いったりね、なんでもありよ！

わかる？オレの言うことわかってる？オレがニューヨークにいるんだ、でもニューヨークがオレン中にあるんじゃないやねえ！笑うなよ、笑うなってば。オレが笑っちゃってるよ、そんなつもりじゃないんだけど；マジな話なんだ。わかるだろ … Ralph Ellison, *New York City*, 1939 (Banks 250) (下線部筆者)

このインタビューと、先ほどのメアリーの語りの類似性により、インタビューした実在の人々の声が、作品に響いていることは明白である。しかし、下線部のような、語り手と聞き手 (エリスン) のコミュニケーションの様子にも注目しておきたい。

ではさらに、1939年の夏に西135丁目とレノックス通りの角でエリスンが出会った (Bascom 44)、レオ・ガーリーという男の話を見てみたい。

神に誓って、これは本当のことだ。お前さんはただ、サウスカロライナのフローレンスって街に行けばいい、そして誰でも会ったものに聞いてみな、そしたら彼らはお前さんに、それが本当だって言うだろうよ。フローレンス、そこも黒人連中にとっちゃしんどい街のひとつなわけ。白人の邪魔をしちゃいけない。スイート以外はね。そいつが、オレが話しているヤツのことなんだ。名前は、スイート・ザ・モンキー。本当の名前は忘れたね、思い出せないね。だけど、みんなそう呼んでて。あまり大きい男じゃなかったな。ヤツはただすごいヤツでね……

こんな具合だったね。スイートは自分のコトを見えなく (invisible) することができた。あんな信じてないね？……白人の連中は朝起きて、ものが無くなってのりに気づくわけよ。店を根こそぎ空っぽにしちゃう。家もそう。なんと、ヤツは銀行までやらかしやがった！……んで、誰もあいつをどうすることもできやしない。なぜって、誰にも見えやしなかったんだから、あいつが悪さをやらかしたときにはよ。(Banks 244) (下線部筆者)

この話が『見えない人間』のなかの、神出鬼没、変幻自在のラインハートという人物造形に寄与していることが推察される。また今後、FWPの資料とエリスンの作品の関連性は、研究が進めば、さらに出てくる可能性もあろう<sup>4</sup>。しかし、これらの類似性はFWPによる作品への現象的な痕跡であり、エリスンがFWPから受けた影響の表層にすぎないと思われる。その点でむしろ着目すべきは、前出した引用の下線部に見られる二人のやり取りであり、語り手とこのインタビューの聞き手、すなわちほかでもない、エリスンとの関係が、ここに書き込まれていることではないか。

本来、面白い語りであるならば、ただ話者の語りだけを記録すればよい。しかしエリスンが、二人のやりとり、すなわち二人の関係性までも描いていることに注目すべきである。話者がエリスンに「わかる？」「笑うなってば」と言っていることから、エリスン自身が男の話聞いて困惑している (らしい) こと、またエリスンが思わず笑ってしまっている (らしい) ことが伝わる。すなわち、このエリスンの書いたFWPの記録は、語り手のストーリーテリングのみならず、エリスンが話を聞いているという相互の関係性が記されているのである。

このエリスンの記録の仕方は、実はハーストンのフォークロアの記録の手法と共通する。太田好信は「ハーストンは伝統がつくりだされる現場を活写しようと努力する。そこにはハーストン自身もはっきりと刻印されている」(107) ことを指摘する。すなわち、語り手と聞き手の関係を描くことによって、記録された語りは、単なる報告文となることを免れる。むしろ、語りの瞬間が生きて見えと見えてくるのである。

その点に注目したとき、『見えない人間』のツールブラッド、そして短編「フライング・ホーム」のジェファーソンの語りは、実はFWPでの彼の仕事の延長線上に位置づけられるのではないか。南部の農夫ツールブラッド、そしてジェファーソンのそばには、必ず聞き手である主人公が描かれてきた。その構図は、彼がFWPにおいて、ハーレムで呼び止めては話を聞いた、南部から北部へ

と移住してきた老人たちと、そしてまさしく聞き手であるエリスン自身の姿にも重なる。

すなわち、エリスンがFWPから与えられた最も大きな影響とは、ハーレムにいる無数の語り部たちの魅力の発見、そしてその場に彼が立ち会うことでうまれた語りの瞬間を、作品で表出してみせることだったのではないだろうか。

おわりに

以上で、明らかにしたように、黒人作家たちは、FWPにおいてガイドブックの黒人関係の資料の収集や、フォークロアの収集を行っていた。国家規模で指揮され、集められたFWPでのそれらの成果が「アメリカにおける最初の黒人研究の促進に役立った」(Mangione 257) ことに鑑みると、FWPに参加した黒人作家たちとは、すなわち、黒人史、黒人の文化のオリジナルの発掘を行った者たちでもあったと評価することもできる。そのような意味で、フィリップス史学の歴史観によらない独自の黒人研究の幕開けに作家たちが関わったという事実は、彼らのFWP以後の活動を理解する際にひとつの手がかりを与えてくれるだろう。例えば、ボンタンはフォークロア集を出版し、ウォーカーはその後、奴隷制度を描いたネオ・スレイヴ・ナラティブと呼ばれる20世紀後半のブームに先んじて、1960年代にすでに『ジュビリー』(Jubilee) を発表している。すなわち、FWPが彼らの表現活動において、自らのルーツへと回帰させる契機を与えたと推測されるのである<sup>5</sup>。

後年、エリスンは、他の多くの作家が国外に移住したにもかかわらず、あなただけ今もハーレムで暮らしているのはなぜかというインタビューを受け、書くためには、彼らの言葉を聞く必要があるからだ、と答えたことがある (Conversation 91)。エリスンにとってFWPとは、未完のプロジェクトではなかったか。ハーレムに残り、無名の語り手たちに耳を傾けながら執筆を続けた彼は、いわば、ずっと一人で、FWPをやり続けていたのだといえるかもしれない。

註

<sup>1</sup> FWPに参加した4500人中、106人がアフリカン・アメリカンであり（1937年当時）、イリノイ・プロジェクトにはWilliam Attaway、Fenton Johnson、ニューヨーク・プロジェクトにTom Poston、Charles Cumberbatch、Henry Lee Moon、Roi Ottley、Helen Boardman、Ellen Tarry、Waring Cuneyなどもいた。またテネシーのガイドブックには、Charles S. Johnsonが関わっている（756）。*Encyclopedia of African-American Culture and History*. Vol.2, Thomson: Gale, 2006.

<sup>2</sup> 大和田によれば、第一次大戦後の政治的地位の上昇に伴い「ヨーロッパの辺境」ではなくなったため、アメリカのナショナリティの定義が必要とされるという、国際政治上の要因もあったという（60）。大和田俊之『アメリカ音楽史—ミンストレル・ショー、ブルースからヒップホップまで』講談社選書メチエ、2011。

<sup>3</sup> 1972年と1977年に当時の資料が修正せずに出版されたRawick版は、北部での調査やFisk大学のプロジェクトの成果なども含め、約3500人分の元奴隷のインタビューが収録されている。Rawick, George P. *The American Slave: A Composite Autobiography*. Westport: Greenwood Publishing Company, 1972, 1977. FWPのオリジナル版は近年になって市民団体によりデジタル化が進められ、2300名以上の証言と、500枚の写真が一般公開された。<http://memory.loc.gov/ammem/snhtml/snhome.html>

<sup>4</sup> 『見えない人間』のペンキ工場のモチーフになった可能性として、*The Negro in New York*のために提出された草稿の中に、エリソンがアメリカの印刷の歴史と、黒人の印刷工について調べ、報告していることが挙げられる。“Negro Printers and Pressmen in history of American Printing<1/3/39>”, *Writers' Program, New York City: Negro in New York* (Micro R-6544) .

Schomburg Center, The New York Public Library

5. その影響は、現代の作家に対しても同様であり、アーネスト・J・ゲインズが『ミス・ジェーン・ピットマンの自伝』(*The Autography of Miss Jane Pittman*) を書く際、元奴隷たちが話していた「英語のリズム」や「どう自分自身を語ったのか」を知るために、ボトキンによって出版されたFWPの元奴隷のインタビューのアンソロジー版『わが重荷をおろせ』(*Lay My Burden Down*, 1942) を参考にしたことが知られている（46-7）。Rowell, Charles H. “‘This Louisiana Thing That Drives Me’: An Interview with Ernest J. Gaines.” *Callaloo*. No.3, 1978: 39-51.

引用・参考文献

Aschenbrenner, Joyce. *Katherine Dunham: Dancing a Life*. Urbana: U of Illinois P, 2002.  
 Banks, Ann. *First Person America*. New York: W. W. Norton & Company, 1980.  
 Bascom, Lionel C. *A Renaissance in Harlem: Lost Voices of an American Community*. New York: Avon Books, 1999.  
 Blumberg, Barbara. *The New Deal and the Unemployed: The View from New York City*. Cranbury: Associated University Presses, 1979.  
 Bold, Christine. *The WPA Guides: Mapping America*. Jackson: UP of Mississippi, 1999.  
 Botkin, B.A. *Lay My Burden Down: A Folk History of Slavery*. New York: Delta Book, 1989.  
 Brewer, Jeutonne P. *The Federal Writers' Project: A Bibliography*. Metuchen: The Scarecrow P, 1994.  
 Busby, Mark. *Ralph Ellison*. New York: Twayne Publishers, 1991.  
 Ellison, Ralph. *Conversations with Ralph Ellison*. Ed. Maryemma Graham and Amritjit Singh. Jackson: UP of Mississippi.

———. *Going to the Territory*. New York: Vintage Books, 1995.  
 Hirsch, Jerrold. “Folklore in the Making: B. A. Botokin.” *The Journal of American Folklore* Vol. 100, No. 395 (1987): 3-38.  
 ———. *Portrait of America: A Cultural History of the Federal Writers' Project*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2003.  
 Hurston, Zora Neale, and Pamela Bordelon. *Go Gator and Muddy the Water*. New York: W.W. Norton & Company, 1999.  
 Mangione, Jerre. *The Dream and the Deal: The Federal Writers' Project, 1935-1943*. Boston: Little, Brown and Company, 1972.  
 Ottley, Roi, and William J. Weatherby. *The Negro in New York: An Informal Social History* Dobbs Ferry: Oceana Publications, 1967.  
 Ritchie, Donald A. “Oral History in the Federal Government.” *The Journal of American History*. Vol. 74, No. 2 (1987): 587-95.  
 Taylor, David A. *Soul of a People: The WPA Writers' Project Uncovers Depression America*. New Jersey: John Wiley & Sons, 2009.  
 Yetman, Norman R. “The Background of the Slave Narrative Collection.” *American Quarterly* Vol. 19, No. 3 (1967): 534-53.  
 Work Progress Administration. *The WPA Guide to New York City: The Federal Writers' Project Guide to 1930s New York*. New York: New Press, 1991.  
 エリソン、ラルフ『見えない人間 (I)』松本昇訳、南雲堂フェニックス、2004年。

———.『ラルフ・エリソン短編集』松本一裕・山寄文男訳、南雲堂フェニックス、2005年。  
 石垣綾子『さらばわがアメリカ—自由と抑圧の25年』三省堂、1972年。  
 太田好信『人類学と脱植民地化』岩波書店、2003年。  
 小松聡『ニューディールの経済体制—失業救済政策を中心として—』雄松堂出版、1986年。  
 椿清文『アメリカ文学とブルース—ラルフ・エリソンの世界』飯野友幸編著『ブルースに囚われて—アメリカのルーツ音楽を探る』信山社、2002年: 122-46。  
 橋本福夫・浜本武雄編『黒人文学全集11 ニグロ・エッセイ集』早川書房、1962年。  
 ヘメンウェイ、ロバート・E『ゾラ・ニール・ハーストン伝』中村輝子訳、平凡社、1997年。  
 峯真依子『Invisible Manにおける地理の問題—聴覚、触覚、嗅覚、味覚、視覚の南部』『九州アメリカ文学』52号、2011年: 78-88。  
 一、『黒人奴隷と自由の帰趨』『九州大学比較社会文化研究』21号、2007年: 83-96。  
 宮本陽一郎『モダンの黄昏—帝国主義の改体とポストモダニズムの生成』研究社、2002。

その他、小谷耕二「ラルフ・エリソン『見えない人間』再考—アメリカン・アイデンティティの問題を中心に—」(2010年日本英文学会九州支部第63回大会アメリカ文学シンポジウム)、深瀬有希子「『彼らの目は神を見ていた』におけるセルフ・ヘルプとニューディール」(2011年日本アメリカ文学会第50回全国大会)の発表を参考にさせていただいた。